

# 校章探訪記

—発案者、興水進氏（昭和25年卒）を訪ねて、及び「校章の木、植樹式」に至る過程—

教諭 三井 誠

記念すべき西暦2000（平成12）年、2月19日、土曜日の午後を利用し、（総務主任）大西勉教諭、（生徒会）清水康久教諭、三井とで春浅き北巨摩の地、須玉町小倉（ここえ）在住本校校章の意匠発案者、興水進氏宅を訪問することとなった。実は、新たな世紀を迎え、しかも本校創立120周年と言う記念すべき年に当たり、是非とも校章の元となった木を卒業記念樹にしたいと言う、3学年（平成12年3月卒業・主任保坂博文教諭）の強い願いからの訪問であった。



甲府一高の校章

そもそも、本校校章のデザインに使われている4枚の葉は一体何だろうかと時折話題になるくらい校章の謂われについては不明になっている感が強く、やっと創立119周年同窓会総会記念誌の特集記事「母校の碑（いしぶみ）」の中で「興水進「校章」—興水進は昭和25年卒。在学中、校章募集に応じて入選。バラ科ズミ（俗名ヤマナシ）の葉を十字に組み合わせた意匠」と紹介されているに過ぎず、学校要覧・生徒会誌等にも全く説明されていないほどであった。

植樹をする以上、3点確かめる必要があった。その一、校章デザインの元の木を植えるくらいの発想は新制高校発足後、50年も経つ間に一度もなかったのか。本校敷地のどこかに「ズミ」の木は植えられていないのだろうか。その二、興水氏が考えた校章の葉は間違いなく「ズミ」の木なのか。その三、「ズミ」の木としても、果たして3月までに入手出来、植樹式の挙行は可能であろうか。

「その一」については、確かに少なくとも一度は植えられていたのであった。平成4年発行、本校百年誌466頁に、「創立95周年には、…また、山ナシの木（甲府一高校章でバラ科ズミ）を、…鰍沢町鳥屋地区内より採取して正面玄関西側に7本植樹した（『95周年綴』より）。」とあり、昭和50年にズミの木は植えられていたことが分かる。ところが、この木は残念ながら平成4年の校舎改築工事に因って所在不明となり、現存しないとのことである（消息通に依ると、地味な木故に多分「雑木」として扱われ、移植対象樹にならなかったのではないかとの由である）。

「その二」については、図書館で有る限りの植物図鑑・百科事典で調べ上げた。結論を言うと、いわゆる「山ナシ」には四説あると思われる。①文字通り、梨の原種である山ナシ。②「ズミ」…しばしば群落を成し、長野県では「コナシ」とも呼ばれている。③「オオズミ」…原色牧野植物大図鑑では「オオズミ」の別名として「ヤマナシ」を記載。④「ズミ」の変種（「ズミ」の葉が特に大きくなったもの）。従来の解釈は②の説を採り、「ズミ」を校章デザインの木と定めているが、これを正確に決定した上でないと発注出来ないのである。

そこで、直接発案者の興水氏に伺うのが一番ではないかと考え、同窓会名簿を繰って興水氏宅に電話を試みたのであった。記載は古くないかとの不安もあったが、元気に電話口に出られ、長く山梨中央銀行に勤められた後、今は農業をやっ



ズミ (ヤマナシ)

ておられること、デザインは当時の一高図書館で牧野植物大図鑑を繰る中で、「山ナシ」の葉は「オオズミ」を念頭において描いたこと、更に、4枚の葉については、キリスト教の十字架をヒントにしたこと等を丁寧に話して下さったのである。

私は短絡にも校歌と校章はワンセットであり、校歌「甲斐の国 みに建ちて…」を踏まえて校章は作られ、木の種類は山梨県の命名の元となった「山ナシ」を採用し、4枚の葉は甲斐の真ん中の位置を示したものと想像していただけに、全くの驚きであった。そして又、「十字架をヒント」のお話にしても当時の時代状況が絡んでいるらしく、もっとお聞きしたいとの思いが募ったのである。

さて、取り敢えず「その二」の問題は、思い掛けず解決されたが、「その三」の問題が厄介であった。とにかく、来月までに「オオズミ」を入手しなければならなかったのだ。牧野植物図鑑には「染料のズミ汁を採るため栽植する高さ10mの落葉高木。」とあるので、染料の産地を探り当てたならば苗木ぐらいはあるのではと期待もしてみた。この問題は時間が逼迫する中で保坂3学年主任が献身的に当たった。県の林務部、鮎沢森林組合、植物に詳しい生物教師等に照会した結果、吉田の造園業者からやっと「ズミ」の木ならば3m程度の物が入手可能との連絡が入ったのである。造園業界では「オオズミ」の入手は殆ど不可能であり、山採りはその困難さからこれも絶望的であった。造園業者からすれば、「ズミ」で十分「オオズミ」の代替は果たせるとのことでは葉の大きさの問題だけであった。そこで記念樹のネームプレートは、輿水氏の御教示通り飽くまで「オオズミ」に拘るが、日程的な問題もあり、実際の「オオズミ」の植栽はいつか機会を待つこととして、わざわざ埼玉から取り寄せると言う「ズミ」を、先の業者に正式に発注することになった（「ズミ」の入手も決して楽ではないのである）。

その後、植樹式では是非校章発案者の輿水氏をお招きし、挨拶を頂こうと言うことになり、その連絡やらより詳しい当時のお話を伺うべく、先の訪問となったのである。

当日午後2時頃、輿水氏宅に到着。大きな門が一際目立つ風格ある邸宅である。奥様と温かく迎え入れて下さり、約2時間お話を伺うこととなった。

前述の如く、初めはデザインの木の正確な名前を知るのが目的で思い切って電話してみたのであったが、思い掛けず十文字の葉の組み合わせが「十字架」をイメージにしたものであることを知らされ、結局輿水氏宅訪問に至ったのであるが、氏の話は極めて感銘深く、単に偶然的にデザインは発案されたものではなく、そこには氏の天賦の才能と非凡な着想、粘り強さが反映されていること、価値観の変革期に当たっての熱い思いが流れていること、戦後民主主義の産物であること等を知ったのである。

以下、その折の話を4点に纏め、記すこととする。

#### (1) 先ず、私の知り得た輿水氏の略歴を記したい。

昭和6年6月18日東京に生まれる。父は東京帝国大学工学部機械科を卒業した優秀な技術者で、「蛇の目ミシン」の会社役員にも名を連ねていたほどであった。戦争が激しくなった昭和19年7月、父の死を契機に、一家は疎開の意味もあり、郷里山梨の須玉に帰り住む。当時、都立十中（現都立西高校）の一年生であった

氏は、甲府中学一年生に転入学。そのまま新制となった甲府第一高等学校を昭和25年3月卒業。強い上級学校進学の意志を持っていたが、義母の病状悪化と弟妹のことを思い、進学を断念。昭和26年山梨中央銀行に入行し、主に外国との交渉や電算機関係、審査部等の業務に従事し、『新業種別貸出審査事典』（1巻～5巻）の分担執筆に与かるなど秀れた業績を残した。山梨中央銀行を退職後、現在は悠々自適に農業に従事している。

なお、銀行時代から仕事の関係で宝石の原産国タイに何度も足を運び、タイ語に精通した氏は、ライフワークとして約11万語のタイ語から日本語への自動変換プログラムを開発中であり、その弛まぬ学者精神にも驚かされる。

## (2) 氏の美術的センスは抜群であった。

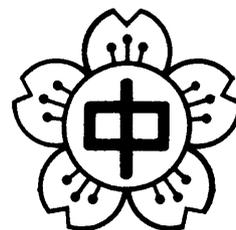
小学生の時描いた絵が文部大臣賞（全国で3人）を取り、当時のナチスドイツに交流絵画作品として渡り、巡回展示された由。ドイツ潜水艦（Uボート）に運ばれて戻ったと言うエピソードも興味深い。又、東武鉄道の観光ポスターコンクールにも入選し、賞金を貰ったりしたこともあり、校章デザインが採用された後には、ある社章のデザインを頼まれ、報償の映画館無料パスは大変同級生に喜ばれたとのことであった。

## (3) 校章デザインは時代状況と絡まり、どのような意図の下に作られたのか。

次の3点が氏の校章デザインを考える際の立脚点であった。

① 甲府中学校の校章は桜をデザイン化したものであるが、敗戦直後のこともあり、桜には「予科練」や狭い国家主義のイメージが付き纏っていた為、この荒れ果てた日本を何とかしなければとの一途な愛国の思いを持ちながらもそのまま使う訳にはいかなかった。しかし、「愛国」が駄目でもせめて「憂国」ならば許されるのではないか。それならば同じバラ科で花の咲く木から選ぶことに拠って、「桜」のイメージを残そうと考え、前述した通り、図書館で牧野植物図鑑のバラ科の項目を片っ端から練りながら、「山ナシ」を別名に持つ「オオズミ」に着目したそうである。鋸歯の葉のギザギザ数が多いので、減らしながら図案化したとのことである。

② 当時、敗戦後の混乱はまだ収まらず、物資も乏しく、窓ガラスが1枚もないような校舎に加えて、価値観の変換に伴う精神的荒廃もすさまじく、教師を教師とも思っていない生徒も多く、施設面と精神面の復興と安定が焦眉の課題だったそうである。占領軍に依る教育改革が進む中で、キリスト教の博愛主義は、当時の近藤兵庫第14代校長を始めとするクリスチャン教師の影響力もあってか、徐々に生徒達にも浸透していったようである（例えば、略年表を繰ると、昭和22年6月、憲法記念講話、講師志村牧師とある。その圧巻は昭和23年6月のキリスト教社会運動家として知られる賀川豊彦氏を招聘して行われた御崎神社での講演会であった。粗野で騒がしかった同級生がやがて一心に聞き入る姿に、興水氏は大変感銘を受けたとも語ってくれた）。仏教徒であった興水氏においても、漠然としたキリスト教への憧れが醸されていたと言う（殊にその人類愛の精神には惹かれるものがあったそうだ）。従って図案化に際しては、是非とも十字架のイメージを葉の組み合わせに活かそうと考え、十字状に配したのであった。



甲府中学校の校章

③ ②の発想が優先されるが、当時、3枚の葉や5枚の葉の組み合わせは、旧制第一高等学校に代表されるように結構見られたが、4枚の葉は当時知る限りにおいては皆無であった故に、新鮮さを狙ったそうである。

なお、蛇足ではあるが、この(3)の件に関して、私なりにもう少し今日的視点も取り入れて敷衍したい。

要するに、校章の元の木「オオズミ」には、桜と同じく旧制甲府中学校の愛国と質実剛毅な精神が暗喩され、「キリスト教の十字架」をイメージ化した十字の葉の組み合わせに新生日本が標榜する平和と博愛の精神が託されているのだ。一見シンプルなように見えても、その中に愛国心と人類愛との相剋を弁証法的に、アウフヘーベンして見せた極めて密度の高い思想が宿っていると言えよう。見事に過去(伝統)と未来(創造)が融合されているのだ。21世紀を迎えようとする国際化時代にあって、「普遍的なヒューマニズムを繁らせることが、やがて健全な愛国心を咲かせることに結び付くであろう」との当時の興水青年の思いを、正しく受け止めることが益々重要になっているのではないだろうか。

又、先に記した「校歌と校章はワンセット…」云々の私の思い込みだが、本校の略年表に拠ると、昭和23年2月24日に校章は選定され、その8ヶ月遅れの同年10月22日に新校歌発表会が行われたとある。従って確かに氏が新校歌から影響を受ける筈はないのであるが、この事実を抜きにすれば、「甲斐の国 みに建ちて…」を象徴化している解釈も、決して牽強付会とは言い切れないのではないか。寧ろ期せずして校歌と校章が一体化したと言うべきではないだろうか。興水氏もそのように解釈して貰っても一向に構わないとおっしゃってくれた。これは秀れた文学と同じで、作者を離れた広い解釈の余地を残す所に改めてこの校章の卓抜さを感じるのである。

#### (4) 民主主義が反映された投票で、圧倒的多数で採択される。

昭和22年、近藤校長の積極的な後押しもあって、生徒の自治を謳った「山梨県立甲府中学校生徒自治法」が制定されるなど、民主主義が急速に校内にも浸透しつつある中で、新校章(当時は帽章の性格が強い)の募集は行われた。従って、教員は勿論、在校生徒、卒業生諸氏にも広く呼び掛けられ、約20点の応募作品が集まったと言う。民主主義に則って、採択は投票で決めようということになり、教員・生徒それぞれ平等に一票ずつ投票したそうである。結果は、2000余票中、氏のデザインは約1600票と言う圧倒的多数で採用されることになった。当時の美術教師からは、十字の葉の組み合わせの斬新さが高く評価されたそうだ。山梨日日新聞にも早速載ったが、肝心の木の種類は桜になっていたとのことである(参考資料1)。

以上、4点について記してみたが、敗戦直後の一高の様子や教育の問題についての氏の見解も極めて興味深いものであった。あつと言う間の2時間余の取材であったが、記念の写真を撮り、2月29日の植樹式での御挨拶をお願いして我々は暇乞いすることとした。久しぶりに貴重な話を聞くことが出来た喜びと軽い興奮を覚えながら家路に着いたのであったが、雪を頂いた南アルプスの峰間に沈もうとする夕陽の美しさは格別であった。

(なお、植樹式のことや、その折の興水氏の有意義な話についても触れたかつ

#### 参考資料1

昭和23年3月10日 山梨日日新聞記事  
「第一高校の帽章きまる」

新制高校の実施に伴いその名も県立甲府第一高等学校となる甲府中学では4月1日からの新発足に先立って新たな帽章を制定することになり、その図案を全生徒から募集、審査した結果、四年生興水進君の考案による桜(ママ)の葉の中央に高の字を配した制章に決めた。

また帽子の2本の白線をそのままにするか廃止するかについて目下頭をひねっている。〔トツ版は第一高校の新帽章 ※写真省略〕

たが、紙数の関係で割愛せざるを得ない。唯、保坂3学年主任作成の「植樹式要項」については、記録上大切な為、参考資料2として載せておく。）

さて、植樹式から約2ヶ月経った春の真中、何と今年は殆ど期待していなかった「オオズミ（ズミ）」の花が三輪ほど開いているではないか。小さな白い花だが確かに桜そっくりの形をしていた。…

「ミレニアム 心語るや 酸実（ずみ）の花」

平成12年11月3日記

〈付言〉

私事で恐縮であるが、30年以上も前に入学した当時、この校章に不思議な魅力を感じていた私は、書きやすいことも手伝ってか時々手慰みにノートの隅に手書きしたものであった。その所為もあるのか、多少大袈裟ではあるが、この不思議な魅力と校章の謂われへの疑問は長く私の心の底に残り、その解明を願って来た。その意味で、この拙文を記すことは私にとって又とない機会でもあり責務のような気がする。まさに、現在への問い掛け無くして、過去は答えてくれないのであ

#### 平成12年卒業生 植樹式について

日時： 平成12年2月29日（火） 午後2時から

場所： 甲府一高図書館前の庭

出席者： 興水 進 氏（校章デザイン）

校長、両教頭、事務長、総務主任、第3学年職員

宮下 隆（生徒会長）、望月智明（同副会長）

各クラス正副理事（16人）

植樹及び支柱設置： 富士吉田造園 渡辺 氏

提示板作成及び設置： アール・ムコヤマ（甲府市）

#### 次 第

（司会 学年副主任）

- 1 生徒代表植え込み（生徒会長）
- 2 生徒代表あいさつ（生徒会副会長）
- 3 興水さんあいさつ
- 4 校長からお礼のことば
- 5 学年主任からお礼のことば



興水進氏（中央）



植樹式